

青戸 かいち (あおと かいち)  
(1928.3.30 ~)



詩人。本名は可一。昭和3年、北海道石狩郡当別(とうべつ)村(現在の当別町)に生まれる。小学6年生の時上京し、立教中学3年生の時、福島県双葉郡へ疎開。福島県立旧制双葉中学校を卒業し、福島県教員養成所を経て、昭和21年、上岡村国民学校(現在の富岡町立富岡第二小学校)に奉職、その頃から少年向けの詩などを作り始める。昭和24年より詩人・小林純一に師事して詩作を続け、昭和36年、同人誌「風」を創刊。18号から「宇宙船」と誌名を変更して主宰、現在300号を超えた(平成20年1月現在308号)。昭和51年、『少年詩集 双葉と風』(初山滋/表紙絵・題字、駒宮録郎/挿絵、教育出版センター、1976年)で第29回福島県文学奨励賞受賞。福島県下の小学校で42年間教鞭を執った後、昭和63年富岡町立富岡第二小校長を最後に勇退してからの創作活動はさらに深まりを見せ、平成8年「サナエとんぼ」で第2回「日本の子どもふるさと大賞」受賞。平成9年「うれしいパーティ」で第9回「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクール特別賞受賞。その受賞2作品を含む『小さなさようなら』(永田萌/絵、銀の鈴社、1999年)で、平成12年度第4回三越左千夫詩賞特別賞受賞。

#### 【児童文化の低俗化への危惧】

青戸の詩作の出発点には、ある人物の影響があった。四倉生まれで、広野町で内科医を務めていた、童謡「とんぼのめがね」の作詞でも有名な詩人・額賀誠志(ぬかがせいし・本名は誠)である。『文化福島』(平成6年11月号通巻275号)では、「異色多彩の人・額賀誠志」と題して額賀の功績とその思い出を綴っている。戦後、子どもたちが低俗な大人の流行歌を歌う悲惨な状況を憂いて童謡に再び情熱を傾けつつあった額賀の門をたたき、彼が熱っぽく次のように語るのを聞いたという。

…この子ども達が、やがて大人になる頃には、おそらく世界は自然発生的に、その国境線を撤廃し、全人類が一丸となって愛情と平和の中に、画期的な文明を現出する時代が来るであろう。その時に当って、若い日本民族が世界に大きな役割を果たすことを信じ、いささかなりとも今日子どもたちの胸に、愛情の灯をつけておきたいのである。…

それは額賀の、今後日本の子ども達に世界を舞台として活躍して欲しいというグローバルな発想に立った童謡に対する熱い思いであった。青戸は富岡まで帰る汽車の中で、「興奮した額を冷たい窓ガラスに押し付け」、自らも童謡創作の意欲に燃えた思い出を語っている。

額賀誠志の思いを胸に、教壇に立ちながら作品を生み出していった青戸だが、同じ『文化福島』(昭和57年5月号通巻125号)では、「『児童文化』の行方」と題した随想の中で、児童文学に携わる者として、また教育者としての両面から見た低俗化する児童文化への危惧を主張している。

…現在、図書(児童文学)を取り上げて見ても、次の世代へ受け継がれるべき格調高い作品は、どのくらいあるのだろうか。悲しくも、「利益を得るためには、どんな低俗化をも辞さない」という商魂の、マンガ攻勢は、文学的に価値あるものを下積みにしてしまっている。…児童の生活感情の中に、日本的感情、情緒は日に日に失われて、「自分さえ良ければ、他人はどうなってもかまわない」というムードが充満していくことは残念であり、一刻も早く、豊かな情操を培い、その墮落に歯どめをかけたい。…

青戸はここで子どもたちへ質の高い正しい文化を継承していかなければ、将来の日本はだめになってしまうと訴えかけている。児童文化に限らず「利益を得るためにはどんな低俗化をも辞さない」「自分さえ良ければ、他人はどうなってもかまわない」という、まさに現代社会に蔓延している悪しき思想を青戸はこのときすでに予感し、日本社会への警鐘を鳴らしていたといえる。彼の詩作の根底には、教育者としてまた文学者として、豊かな情操を培うべく日本人としての格調高い文化を子どもたちに伝えてゆきたい、伝えていかなければならないという願いや使命感が込められているのである。

#### 【双葉郡夜ノ森とアイヌの思想】

青戸に影響を与えたもう一人の師は、北原白秋の最後の弟子と言われる小林純一である。初の詩集『双葉と風』を出版した際には、序文を小林が担当、青戸の住む富岡町とさわやかな詩集のイメージを重ね合わせ、次のように述べている。

…青戸さんの居住地であり、第二の故郷は「福島県双葉郡夜の森」です。「双葉」と「夜の森」という、一見対蹠的なイメージが、語感の上から印象的で、青戸さんのアドレスは住所録を見ないでも書けるほどですが、青戸さんというと、昼はみどりに映える校庭で子どもたちと跳ねまわり、夜は夜の森の静寂に瞑想する詩人教師青戸かいちの像が浮かんでくるのです。…

この『少年詩集 双葉と風』という詩集は、昼間の「双葉」郡の萌ゆる緑の中、校庭での子どもたちと汗を流してかかわる教師としての青戸の姿と、夜の幻想的な「夜ノ森」の中で作品を生み出すために瞑想する詩人としての青戸の姿が交錯しているという。この作品は、愛する自然豊かな富岡の地を舞台とした、彼の躍動と静寂との結晶であると言える。

また、次に続く第二詩集『童謡集 ぞうの子だって』では、青戸が川内村第二小学校校長時代に天山文庫で知り合ったという草野心平が序文を務め、彼の作品を「汎神論的愛」つまり「人間をもひっくるめての植物や動物に普遍する愛」が背景にあると述べている。草野の評する「汎神論的愛」からは、青戸の生まれ故郷の北海道・アイヌの思想が連想される。アイヌ民俗の信仰は、動植物や自然現象には「魂・霊力」が宿っているとされ、それはしばしばアニミズムにも通じる観念であるとされているが、ここには、人間と自然を区別することなく、全てのものに対してわけ隔てない愛情をそそぐ、青戸の雄大で温かい人柄を感じる。

青戸の作品の背景には、居住地である富岡の自然と、生まれ故郷である北海道・アイヌの思想との融合を見いだすことができるのである。

#### 【美しいことばのひびきあいを子どもたちへ】

青戸の生み出す詩は、自然を豊かに歌い上げる、やわらかな美しい言葉使いが特徴的である。様々な作品が評価され、下のとおり小学校の国語の教科書や中学校の音楽の教科書にも多数採択された。とくに、「おがわのはる」は、平成17年度から平成20年まで、福島県内の福島地区や田村地区などの小学校で東京書籍の国語の教科書が採択されたため、県内の多くの子どもたちにも親しまれる作品となった。

- ・1996年版 学校図書 小学校 こくご 二年下 「なぎさのたいこ」
- ・2000年版 学校図書 しょうがっこう こくご 1ねん下 「きのポケット」
- ・2005年版 東京書籍 新編 新しい国語 二年上 「おがわのはる」

ほか

(東京書籍 新編新しい国語二年 上)



おがわのはる  
あいうえおがわに はるがきた  
かきくけこおりも もう とけて  
さしすせそろった つくしんぼ  
たちつてとんでる もんしろちよう  
なにぬねのはらの ひばりのこ  
はひふへほんに うれしいな  
まみむめものかけ めだかのこ  
やいゆえよしのめ よけていく  
らりるれるろん うたうみず  
わいうえおがわに はるがきた

「おがわのはる」「きのポケット」収録の『童謡集 ぞうの子だって』で、青戸自身は、この作品の最後に「とじめがき(父兄の方へ)」として「美しいことば」にふれることに関しての子どもたちへの願いを寄せている。

…幼児は、本を読んでもらうことが、とても好きです。特に、耳に快くひびく、お父さんやお母さんのやさしい声の「読み聞かせ」はどんなに幼児の心に愛情を注ぎ込むことでしょう。幼児への詩を通して、日本語の美しいことばのひびき合いを、どうぞ何回でも、「読み聞かせ」てください。…どうぞ、本書を通じて、沢山の語彙にふれさせると同時に、自然の美しさや、人や動物のやさしい心にもふれさせ、「美しいことば」で、物を考える子どもに育ててください。…

この詩集の締めくくりにおいて、美しいことばのひびき合いをぜひ子どもたちへと、保護者への呼びかけをしているのが印象的である。耳に快くひびく美しいことばを、お父さんお母さん自身のやさしい声でわが子たちに伝えてほしいと訴えている。子どもたちが自分で読むことよりも、大人が愛情を持って彼らに読んであげることの重要性を説いているのである。ここからは、子どもたちを正しい方向へ導くのは大人の責任であるという思いを感じる。子どもの喜ぶものだけを与えるのではなく、正しい文化・正しい価値観を伝えるために、美しいことばで綴った質の高い文学を、大人が選んで未来ある子どもたちに与えるべきだとしている。

長年にわたる詩の創作が評価され、平成18年第17回みんゆう県民大賞・芸術文化賞受賞。平成19年第56回芸術部門(文芸)で福島県文化功労賞受賞。現在は、富岡町図書館資料選定委員・富岡町図書館協議会委員として、富岡町の文化向上のためにも貢献している。世界の舞台に立っても恥ずかしくない日本人の姿を願った、同じ郷土の詩人・額賀誠志の志を受け継ぎ、今なお創作への情熱を燃やしている。

本人写真は「福島民友新聞」(2007年11月4日)より

【参考文献】 『日本児童文学大事典』(大日本図書,1993年)  
「福島民友」(2006年5月7日～5月9日)第17回みんゆう県民大賞」

児童図書研究室 加藤麻依子